4

王子は ひとめで、シンデレラの 手を はなしません。
ふと 気づくと、ーつの ーつに なくなって。
「あっ、いけない…おやすみなさい、王子さま」
シンデレラは てをはらって おじぎを すると、いそいで 出ていきました。
が、あわてた ひょうしに、だいたんに ひだかり、ガラスの くつが ぬげてしまいました。
でも、とうとう もとめる ひとが ありません。
シンデレラは、まっていた はしゃに のって、いそいで いえへ かえりました。
シンデレラが かえったあとも、王子は ガラスの くつを もちあるいて けっこんを
「ぼくは、この ガラスの くつの もちぬしと けっこんする」
そして あるひの ことが くにじゅうに ひろまると、手がかりの ガラスの くつが、足に ぴったり あの人を さがしました。
つぎは、シンデレラの いえにも やってきました。
「足が 入れば、王子さまの およめさんよ」
ふたりの おねえさんたちは 足を ギュウ、ギュウと、おしこみましたが、どうしても 入りません。

3

「さあ、この 金のはこの 中に 入って ください」
シンデレラは、ふしぎに 思いながらも、はこの 中に 入りました。
「ふたを とじて…ください」
「やはり 王子さまは、だまされて いるのだ」
おじいさんは、ふたを とじて、ひもを かけました。
「ふたを 開けて…ください」
「おまえの 望みは、かなえて やったぞ」
おじいさんは、はこを 馬車に のせて、いそいで 出かけました。
「ここは、どこ？」
シンデレラは、はこの 中で、ふるえて いました。
「ここは、どこ？」
「ここは、どこ？」
「ここは、どこ？」